

北川一 大地の芸術祭の10年間は、日本全体のなかで戦後の冷戦下の中での豊穣、その先にあつたバブルを経て、これから一気に崩壊していくと思っています。そのようななかでやるべきことは、自分の足の所でやれることをどうやれるのか、ということしかないと考えてきました。そのような中で空家というものが多少の光明で、ふるさとという土地に足をつけて何かやるべきの一つの可能性になり得たら良いと思いました。

入澤一 かつては16戸、今は5戸の願入集落で水落丑松郎に9名の展示を行い、二階を茶室にしたいとオーダーしました。

安藤一 この家は地震にあい直すことを断念されてしましました。民家とは3年も放つておくと直すのは不可能になります。空家を何とかするということは大変なことです。関東などと比べ妻有の民家は背が高い際立つ特徴があります。雪に埋もれても光を取つたり

## 難しい場面の中でしか可能性はないだろうと思う



左から: 安藤邦廣、入澤美時

第6回

# 民家の未来

入澤美時（入澤企画）  
安藤邦廣（建築家）  
×  
北川 フラム



寝て食うという場所は一部であとの部分は何のためか理解されてないかも知れない

を長く使うための知恵です。筋交いを入れたり合板で固めた硬い構造ではない。筋交いがあると骨にダメージが入ってしまいます。これは焼き物を展示、楽しむ場所ということだけたが、基本的に民家はそう出来ていると思います。寝て食うという場所は一部で、あと部分（土間・板の間・座敷）は何のために理解されないかも知れない。民家は寒い広い暗い使いにいくと思われていて、現代的な寝食のための家に当てて考えると暮らしにくいということになります。民家は本来は第一次産業、農林・漁業の仕事場（土間）と囲炉裏のある囲樂の場（板の間）もてなしの場（座敷）になっています。農業漁業は共同生活で、人と向き合うことが必要です。仕事場ともてなしの場が大半を占めているのが民家です。囲樂の場として焼き物で囲炉裏を作つてもらいたいと思いました。地域の米を食べてもらおうということで窯の提案をした。もう一つは水を得るということが絶対必要で、水をどうに確保するかといふことが大きい課題。水をこの家の中に表現するものが大事なことだと思いました。火と水が暮らしを支えるということをもてなす上でのテーマとしていました。民家の基本的な力とは、現代の暮らしから遠のいた、

て暮らすという基本で民家はできているということを、都市社会の中で持つていく、それが自分なりに訴えたかったことです。地元の方に守つてもらえばこのプロジェクトは成功だと思う。民家だけを直しても意味がない。この地域で暮らしの形を作らなければ、よう今の時代に別の形で暮らしの形を作るか、見つけられるかということが重要な課題です。入澤一 安藤さんの持論で民家というのは地域の記憶の集積の場。だから都会の人Uターンの人が住み始め、都市の様々なネットワーク・知識・技術が入つっていく。このことが地域の可能性になつていいだろうと思つていて、難しい場面の中でしか可能性はないだろうと思つています。レストランが象徴的でしたが、地域の女衆、裏で支えた男衆が、嬉々として働いていた。狭い山の中の道路が大渋滞した、その姿が、今話題の都市と地域の格差というものをどのようにしていくかという問題の解決策、安藤さんで言わせる民家といふものに象徴していくのではないかと思う。

安藤一 民家から見ると、様々な人が来るといふことが一番大事です。よそ者が入つていくことで新しい形が生まれる。民家を見ればその地域に過去どんな波が来たかが分かります。建物の造りをみても、波が過去三つ来たという証拠。土での暮らし、板間での暮らし、そして畳の部屋。この地域に少なくとも三つ届いていて、それが重なり今の暮らしをしてきています。芸術祭をやるという事は一つ重ねて新しい暮らしの形が始まる事だと思います。民家は生き続けています。少なくとも三つ重なった四つ目が始まつたと考えられます。